

学生の議論

先日、大学院で研究科横断的に行っている教育プログラムの合宿に参加した。3日間の合宿で、学生が課題志向的な問題解決のためのグループワークが課せられていた。漠然としたお題が与えられて、その中で解決すべき課題を見つけて何らかの提案を行うというものであった。社会科学分野から農学を含む自然科学分野の大学院生が参加しているの、視野の広い幅広い議論の展開が期待できた。

実際、その中で学生の議論には注目すべきものがあった。残念ながら彼らが行った最終的なプレゼンテーションは極めてつまらないものになっていた。面白かったものがなぜつまらないものになってしまったのかということも、書き留めておきたいことのひとつなのだが、それはむしろ教育技術の問題として別に論じなければならないだろう。

伝えたいのは、どこがおもしろかったのかということである。

面白い議論だと思ったのは、エボラ出血熱のような破滅的な感染症の防疫に失敗し、ある地域が、感染症の流行のために、感染症のコントロールを含めて、多くの機能を失いつつあるときに、どう対応すべきかという議論である。もっと具体的に言えば、知事や町長など政策決定者の多くも病に倒れ、責任を持って判断すべき人があいまいになっている状況で、誰が何を優先順位として判断するのかということである。おそらく、これらは急を要する判断で、誰かが瞬時に判断しなければならない。その判断が正しいとは限らないから、その判断の犠牲になったり、迷惑をこうむる人が出てくることは大いにあり得るだろう。しかし、判断の遅れは致命的な結果を招きかねないので、誰かが方向性を持った判断せざるを得ない。そういうときのために、そういう状況で、誰が何を優先して判断するのか、普段から社会全体で合意しておかなければならない。その合意をどのように作るかという問題である。哲学的な問題ともいえるが、実際に起こりえる実務的な問題でもある。実際のどのようなことが起こりえるのか、具体的に問題を想定して、優先順位を考えなければならない。切り捨てられかねない人々も当然いるだろうから、どのような判断をしても後に倫理的な批判を受けるだろう。それらを含めて合意を作るのは難しい。その場になって考えれば良いことだという態度もあり得るのだが、それならば、そういう場面で決断できる勇気と見識を普段から人々一般に涵養しておかなくてはならない。大変難しい問題だが、考える価値のある面白い問題だと思う。飛行機に乗ると緊急時の避難行動についての説明があるが、そういう説明では、緊急時に酸素マスクが天井から降りてきたら、まず、大人が自分で酸素マスクをして、それから子供にマスクをつけるように指示される。確かに、大人は子供を助けられるが、子供は大人を助けられないと考えれば、まず、大人がマスクをつけるというのは合理的な判断だろう。多分、世界中がそうなっているのだろうと思う

が、それを考えたのは日本人ではないだろうと思っている。日本人だと子供は大切だから助けるべきだという情緒で判断しそうだ。私は、なんとなく、我々日本人はそういう議論が苦手だと思っているが、日本人だけが苦手なのでなく、世界中の人々がそういうことをあまり考えたくないと思っているのかもしれない。それではいけないと説教するつもりもないが、何らかの原則がないと多分混乱するだろう。緊急時に適切な判断をすることは難しいし、だからと言って判断を放棄することもできないので、平時から合意を作っておくべきだという意見には一理あると思った。これらの議論は一時期流行った「正義論」にも通じる。是非、彼らがどのように考えるのか訊きたかった。

もう一つ、面白かったのは、レジリエンスという課題をもらったグループだった。グループの中には、東北大震災の被災地で具体的に活動した経験を持つ学生がかなり含まれていたのも、極めて具体的に議論していた。彼らは、レジリエンスを被災した後に、復興に立ち上がる意志と能力と考え、被災以前にそれらの能力を涵養しておくためのシステムを考えた。災害から復興し産業を立ち上げるには何が必要なのかを具体的に考えていた。彼らによれば、被災地域の内部における人々の結束が重要であるが、それ以上に必要なのは、復興のために地域外部の人の協力を有効に引き出すことである。そのような内部の結束と外部からの協力が集中するポイントに、積極的な意志と仕事を作り出すビジネス感覚を持った人物をあらかじめ配置しておくことが、復興を大いに促進するということである。そのような人物を日頃から作り出し、そこに引き留めておかなければならない。それを実現することがレジリエンスの向上だということであった。彼らが提案しようとしていたのは、おそらくもっともはげしく津波被害を受けるであろう漁港近辺に、数階建ての避難所を作り、そこを、漁師の仕事場（いわゆる番屋）、観光スポット、住民の集会所、民宿、ショッピング・モールとして活用するというものであった。まじめな人たち（正しくは自分を真面目だと思っている人たち）から非難されることを覚悟して言えば、そこは被災の中心なのだから、被災後、観光スポットとなるだろう（いわゆる被災地ツアー）。そこを復興拠点として使う。そこに、観光事業などを通じてもともと外部と濃厚なつながりを持った人を配置しておくのである。同時に、そこには地域的な結束の中心でもあり、ビジネスマインドを持った地域の有能な人材も日頃出入りしている。災害があれば、観光を通じて地域に関心を持った人々が、その避難所兼民宿にたちまち訪れてくるだろう。そうした人脈を通じて、復興後のビジネスを立ち上げていくことができる。

「被災地ツアー」には嫌悪感を持つ人もいるだろう。しかし、被災地ツアーは現実に行われている。いわゆるボランティアも多少は良心の呵責を持った「被災地ツアー」かもしれないし、「被災地ツアー」客にも有能な善意の人もいる。それが現実であるならば、その現実を前提に復興を考え、そのことを災害以前から織り込んで、システムを作っておくべきでないか。その方が明らかにレジリエンスが高い。きわめて面白い有益な提案である。少なくとも参考にすべき様々な要素を含んだ提案である。

こうした提案には様々な批判があるだろう。いわゆる「進歩的文化人（すでに死語か）」からはやり玉に挙げられそうだ。しかし、その提案には我々が考慮すべき様々な要素が含まれている。私はこうした提案をしようとして話し合った彼らの若さをうらやましく思う。私には彼らの提案が理解できるし、おそらく、自分もそのような提案をすることが可能だと思う。しかし、やらない。私はもはや65歳になろうとしている。これらの提案に対しては、様々な方面から反発があることを予想し、黙っていることを選択する狡猾さを身に着けているからである。だからこそ、彼らがうらやましいのである。

その子二十歳、櫛にながるる黒髪の、おごりの春のうつくしきかな

晶子

（おねがい：これらのアイデア、もちろん、積極的にどこかでパクって構わないのですが、最初の発想は彼らだと断りを入れてください。喜びます。もちろん、わたくしも彼らのアイデアをパクって書いています。関係ないけど、このごろパクて書くと朴て出ちゃいますね。）

(20140331)